

## C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

私のイタリア留学体験記

## \* たのしいイタリア語講座 ボローニャ編 \*

神原 久美子

ウロ覚えのイタリア語をしっかりと使えるようになろう、そう決心したのは3年前。以来、文法だけはしっかり勉強してきた。さりとして、いきなり Rai(イタリア国営放送)をダイレクトに理解できるほどでもない。中途半端な段階にさしかかった。何か物足りない。折しも不景気で仕事が楽になり、ユーロが下がった。これ幸いと6週間だけの語学留学を決めた。ボローニャを選んだのは、人の気質が穏やかで、市街地が空港から近いから。初めてイタリアに留学する人にとっては、最も適した土地の一つではないかと思う。



【ボローニャ名物 “ポルティコ(柱廊)”】

3月のボローニャは寒かった。季節が日本より1ヵ月ほど遅れているような感じがする。だが着いた初日でいきなり蒼ざめた。大きな荷物を引き引き目指す家を探したが、家々の壁に書かれている番地表記に、書類にある番地が見当たらない。いろんな人に尋ねても、そんな番地はないと言われ、公衆電話も見当たらない。血の気が引い

た。近所のパールの親切なお姉さんが携帯を貸してくれたおかげで、番地が13-2でなく16-2だったことが判明。誰が間違えたかは知らないが、全くいい迷惑だ。大家にこの事を報告すると、それは学校の秘書が間違えたんだと言い、後で学校に苦情を言ったら、秘書は大家が間違えたんだと言う。行く前に家主となる人にメールで連絡はしていたが、番地まで確かめておかなかった私がうかつだというのか？まあともかく、何事にも事前確認が必要だと思ひ知る。

ホームステイ先は学校側がアバウトに決める。だから人により、待遇や家の設備、学校への距離がずいぶん違ってくる。週単位で家賃が決められているため、もし家主との相性が合わないなど問題があれば、家を変えることもできる。ただし、滞在許可証が下りた後での住所変更は大変難しくなるらしい。私の場合は学校から歩いて10分のところにあり地理的には問題なかったが、とにかく室内が寒かった。持って行った貼るカイロがどれだけ役に立ったことか。学校とのメール連絡の中で、一応のリクエストは伝えることができる。ただし、どこまでそれがかなえられるかは、神のみぞ知るというところか。しかし、だいたいはその人に必要となるところに縁ができるような気がする。日本の便利な生活と比べて、あれがない、これがないと、不平不満を並べたてるだけではいつまでも楽しくなれない。与えられたものに素直に感謝する姿勢が必要だ。留学生は縁もゆかりもない一外国人である。そんな人間を家に住まわせて台所

や浴室まで使わせてくれるのだ。家賃を払っているからと開き直るのではなく、住人の一人一人と仲よくなるように心がけたい。

イタリアには原子力発電所がない。そのため光熱費が日本に比べて非常に高い。日本のように一つの部屋で複数の暖房器具は使わない。多くが壁に取り付けられたガス式のサーモスタットが一つだけである。これがじんわりと暖くなるため、いささか頼りない。ポコポコに着込み、壁に張りついてよく勉強していたものだ。浴室の湯船も、日本の半分以下だろうか。体を捻じ曲げでもしない限り、首まで湯に浸かることはできない。しかしこの生活にだんだん慣れてくると、日本の生活が、いかにエネルギーを湯水の如く消費してきたかよくわかる。電気やガスの使いっぱなしは家主とのトラブルの元ともなろう。資源の節約を常に心がけた方が、家主の心象もよいはず。

語学学校の滞在期間が5週間だったため、授業はできるだけ多く取った。60分の個人会話、100分ずつのグループ会話と文法授業で、授業が終わる頃には、頭がしびれて湯気が出そうな気がした。たった1ヶ月程度でペラペラになれるはずもないのだが、とにかく勉強するのが面白かった。というよりは勉強しないと授業が楽しくならない。欧米系の学生に比べると、いちいち文章を頭で組み立てないと話すことができないため、発言に時間がかかる。考えているうちに話題が移動するため、発言をあきらめることも多々あった。そのため日本人は大人しい、時には意味がわかっていないと誤解されやすいのだが、とんでもない。頭ではわかっちゃいるが、うまく答えられないんだ！悔しいので余計に勉強した。だが口数では不利な日本人も、文法と語彙では俄然強くなる。根本的に文章構造が違うので、一からイタリア人が覚えるのと同じかたちで覚えているからだ。

勉強の中で一番役に立ったのは、イタリア会館の中級文法のテキスト。決してお世辞で言っているわけではない。中級レベルの授業では、時制の一致や間接話法などを使えることが前提となる。大きな文法書では、わからない部分の説明を探すのにも時間がかかる。ところが、この薄いテキストには過去・現在・未来の動詞の使い方が図解され、迷うことなく適切な表現法がわかる。厳密に言えばおかしなところもあるらしいが、実際にイタ

リア語を使う者にとって、これほど実用的な文法書はない。文法で悩んでいる人に紹介すると、何人もがコピーしていた。きっと今でも重宝されていることだろう。留学する前にこのテキストを丸暗記しておけば、もっと楽だったかもしれないと、今更ながらに思う。



【ネットウーノの泉】

しかし、かなり難しい文法事項でも、できるだけ外国人に理解しやすいわかりやすいイタリア語だけを使って説明していく先生方の技量は、ただ「凄い」の一言に尽きる。たまに頭の中に文章の内容がビジュアルで浮かぶこともあり、言葉を口にするだけで、人の想像力がよくもこれだけかきたれられるものかと感心することさえあった。その反面、わからないところを聞いても、これはこういう言い方かしないと、ばっさり片付けられることもある。イタリア語は理屈ではない。とにかく覚えるしかないんだと肌で感じた。わからないからといって懇切丁寧に繰り返し教えてくれるわけではない。繰り返すことを嫌う先生も中にはいる。わからなければ友だちや親切な人に教えてもらって、とにかく自力で解決する他はない。だがそんなこんな苦労が自分の実力につながる。自信がつくほどに、先生に対する親近感も増すというものだ。

イタリアも不景気だった。家主の女性も求職中。今は部屋貸して糊口をしのいでいる。同居する大学生も3月に卒業したものの、半年くらいは図書館でのバイト生活らしい。語学学校の先生方もいろいろなバイトを経て、40歳近くになってようやくこの職にありつけたという。イタリア人でさえ定職を見つけるのは難しい。おまけに毎日のようにアフリカ、東欧などから移民が流れ込む。インドや

中国などアジア系も多い。従って、一つの仕事に対する競争率はまことに激しい。語学学校の中で、1年間くらい留学してそのうち仕事をイタリアで探すつもりのお気楽な日本人を何人も見かけた。が、正直なところ、イタリア語に精通しているとか、何か特技がない限り、就職の可能性は低いように思う。だがつい最近、日本人学生の一人が寿司職人の見習いの仕事をパレルモですることになったと聞いた。イタリアに残ることを希望し、ひたすら情報収集していた彼の姿を思い出す。イタリアで働くことは不可能ではない。しかしながら、イタリア人に受け入れてもらうために、熱意と誠意をもって、与えられた頼みごとをこなしていく忍耐力が必要となろう。あいつは頼りになるという評判がロコミで広がり、いつしか次の仕事につながっていく。また仕事だけではなく、性格に愛嬌があることも重要である。真面目な話をしている、どこかで笑いをとる人が愛される。その点でボケとツッコミのできる関西人は有利かもしれない。

日本に比べれば人口は約半分、賃金水準も日本の方が断然高い。だが金をかけず生活を楽し

む術にかけては、イタリア人に及ばない。足りないところはみんな協力。落語に出てくる長屋の八さん熊さんのような暮らしを、このポローニャで体験できるとは夢にも思わなかった。日本のように便利ではないが、篤い人情があった。

あっという間に6週間が過ぎた。仕事に追われる日々に戻ると、ポローニャにいたことが嘘のようだ。私のイタリア語も発展途上。わからないところは山とある。だが現地で勉強したことで、自分のレベルを的確に知ることができた。まだまだ道は遠い。けれどもいつの日か必ずかの地へ戻り、出会ったさまざまな人々と再び温かい言葉を交わすために、これからもイタリア語を地道に続けていこうと思う。

(語学講座受講生)

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC  
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy  
Tel. & Fax : (06) 4743. 212  
E-mail : comeva@nipponclub.it  
URL : www.nipponclub.it

お問い合わせ等はNIPPON CLUB SNC宛てにお送り下さい。

## VIVA IL CINEMA ITALIANO !

第18回 『天使と悪魔』

ANGELS & DEMONS

松島 征

今回は、最近公開されたばかりのアメリカ映画『天使と悪魔』*Angels & Demons* について書きます。原作は、『ダ・ヴィンチ・コード』*The Da Vinci Code* で大当たりをとったダン・ブラウンの同名の小説です。じつは『天使と悪魔』の方が、ハーヴァード大学教授のロバート・ラングドンをも主人公とするシリーズの第1作で、『ダ・ヴィンチ・コード』はその第2作目に当たるのですが、第2作の方が先に

映画化され大ヒットをしたので、「柳の下のドジョウ」を狙って第1作『天使と悪魔』が、同じトム・ハンクスを主演俳優として急遽映画化された、というわけです。このような営業成績至上主義のハリウッド映画の紹介などは、わたしは本来やりたくはないのですが、この映画の主要な舞台は、ローマおよびカトリックの総本山ヴァチカン・シティーなので、そのことに食指を動かされ、なにか書いてみようという気を起こしました。

もちろん、この映画の見所は「ローマの観光スポット巡り」以外にいくつもあります。まず、ハリウッド映画のお得意とするスリルとサスペンス、それにアクション(以前にも書きましたが、わたしにはこの手の映画は刺戟が強すぎて、見ていると疲れてしまう。こんな映画に見慣れてしまうと、ヴァイオレンスやレイプに不感症になるのではある

まいか、と心配です。最近の無動機・無差別の殺人や集団強姦事件の風潮は、このような殺伐とした映画の氾濫とけっして無関係ではない、という気がします。それから、ローマ教皇庁の内部の描写(とくにコンクラーベの様子)、秘密結社「イルミネーティ」をめぐる陰謀、さらには「欧州原子核研究機構」(CERN)の創造した「反物質」を用いた時限爆弾ストーリー、など。トム・ハンクスの間抜け面や、かれのモタモタとしたアクションなど見たくもなかったのですが、「くだらない」とつぶやきながら、波瀾万丈のストーリーにつられて結局全部見てしまいました。文庫本にして千頁を越すような大作を2時間あまりの長さの映画に凝縮しているので、雑多な素材を詰め込みすぎていて、見る者は消化不良を起こしかねません。この映画エッセーでは、原作の提起している様々な要素のなかから、「ローマの観光スポット巡り」と「芸術作品(絵画・彫刻・建築など)の探求」というテーマにポイントを絞って書いてみましょう。

まったくの余談ですが、わたしは『天使と悪魔』を一般公開のその日に神戸で見ました。ちょうどその頃、例の「新型インフルエンザ」とやらの感染者が神戸のいくつかの高等学校で見つかり、マスコミなどが大騒ぎをしていた時期だったので、映画館のホールはがらがらの状態で、ゆっくりと見物ができました。余談のついでにもう一言云わせてもらうならば、最近の映画館はどこもかしこも「指定席制」を採用するのが流行りのようですが、「指定席制」は劇場だけにしてほしい。このやり方は映画館に似合わない、とわたしは思います。映画館は原則として自由席であることが望ましい。「指定席制」では、おしゃべりをするおばさんや、ものを食べている非常識な人がそばにいても席を替われないではありませんか。映画館のホールは、自由に席を選ぶ権利がある空間であってほしい。わたしはなるべく「指定席制」のホールには行かないようにしているのですが、今では「指定席制」の方が多数派になってしまい、窮屈な思いをしながら映画を見ている。自由を返せ！

いつもならばここで映画のあらすじを紹介するところですが、先にも述べたように雑多な素材の寄せ集めからできた作品であるため、一本の首尾一貫したストーリーとしては要約しにくいという

理由、それにまだ映画を見ていない読者のためには結末のどんでん返しをばらさない方がいいだろうという配慮から、あらずじを紹介することは控えます。

最初の殺人は、スイスのジュネーヴ近郊にある「欧州原子核研究機構」(CERN : Centre européen pour la recherche nucléaire)で発生します。機構が生成した「反物質」を秘密組織「イルミネーティ」が強奪して、それを最新型の「時限爆弾」として用いようとするのですが、その過程でセンター長が何者かによって殺されます。この殺人の目的については疑問がないわけではないのですが、それを述べ始めるとまた脱線になってしまうので、あえて触れないことにします。

秘密組織「イルミネーティ」はこの時限爆弾をネタにヴァチカンを脅迫することになり、ヴァチカンから捜査の依頼を受けたラングドン教授がボストンから颯爽と乗り込んできます。しかしながら、ミステリー作品の決まりごとに従い、探偵は殺人事件の犯行を止めることはできません。ラングドン教授とその助手役のヴィットーリア(物理学者)が犯行の現場に息せき切って駆けつけたときには、すでに枢機卿殺しの作業は完了しているのです。

最初の枢機卿殺しは、ポポロ広場に面したサンタ・マリア・デル・ポポロ教会(Santa Maria del Popolo)の地下室でおこなわれます。だがその前に、ラングドン教授とその助手は、ラファエッロ・サンチョの墓を求めてパンテオン(Pantheon)に向かいます。天井の中心にポッカー開いている天窓を「悪魔の穴」と勘違いしたから。すぐ誤りに気がついて、サンタ・マリア・デル・ポポロ教会に駆けつけますが、時すでに遅し。次期教皇の最有力候補4人のなかの一人である枢機卿は、ラファエッロがその設計に関わったキージ礼拝堂の地下室(「悪魔の穴」と呼ばれている)で、四大元素のひとつである〈土〉に埋もれて死んでいたのです。四大元素とは、錬金術師たちがこの世界を構成する素材であると考えていた〈土〉、〈空気〉、〈火〉、〈水〉のことで、秘密組織「イルミネーティ」はこれらの四大元素を、かれらの焼き印のアンビグラム(逆から読んでも同じに読める対称的な文字のこと)のデザインに用いたとのこと。

ちなみにこのサンタ・マリア・デル・ポポロ教会は、小さいながらも八つの礼拝堂をもつ、美術史

的に価値の高い教会です。映画のなかでは、カラヴァッジョの描いた「聖ペテロの磔刑」が映し出されていますが、ほかに「聖パウロの改心」(同じくカラヴァッジョ)、「幼子イエスの礼拝」(ピントリッキオ)、「アバククと天使」「ダニエルとライオン」(ベルニーニの彫刻)などの傑作があります。映画では、ベルニーニの天使の指先が第2の枢機卿殺しの方角を指さしているのだそうです。

その殺人事件の舞台とは、こともあろうにカトリックの総本山ヴァチカン・シティの入り口に位置するサン・ピエトロ広場なのです。もう一人の教皇有力候補者が、広場の中央に立つ巨大なオベリスクの根元で、肺に穴を空けられた死体の形で発見されます。四大元素の一つである(空気)が抜かれていた、というわけです。なお、ヴァチカン市当局は広場での撮影を許可しなかったので、映画の撮影隊は小型のカメラをもちこんで盗み撮りをしたらしい。セットにしてはよくできているなあ、と感心しながら画面を眺めていたのですが…。

ちなみにこのサン・ピエトロ広場は、ヴェネツィアのサン・マルコ広場、フィレンツェのシニョリア広場と並び称せられる、イタリアを代表する広場の一つで、クリスマスや復活祭には、世界の各地から数万人の善男善女が集まって来ます。この楕円形の広場は、全部で284本の列柱が4列に立ちならぶ回廊に抱かれているかのような調和に満ちた形をしています。ベルニーニの設計により1667年に完成したのだそうです。エジプトから運ばれてきたオベリスク(高さ 25.5m)のまわりの地面には、天使の顔がはめ込まれたレリーフがあり、その一つ「西風」West Ponente の天使が吐く息の方向が、第3の殺人現場を指しているという設定になっています。

さて第3の枢機卿殺しの現場ですが、サン・ピエトロ広場から3km ほど真東に行ったところにあるサンタ・マリア・デッラ・ヴィットリアという教会に設定されています。この教会の内陣で、磔刑にされた枢機卿が、四大元素の一つである(火)に包まれて殺されるのです。外見は目立たない小さな教会ですが、内部に足を踏み入ると、正面には金色に輝く祭壇があり、天井を見上げると鮮やかなフレスコ画が目に入り、絢爛豪華なバロック芸術の魅力をとっつき堪能することができます。向かって左奥の礼拝堂には、ベルニーニの代表的彫

刻作品の一つ「聖女テレサの法悦」が納められています。アピラ(スペイン)の聖女テレサは、神秘的・霊的な体験を重ねるうちついに空中に浮遊して、天使から愛の矢を射られたという伝説が伝わっている。雲の上に横になって体をのけぞらせ、なかば唇を開いて恍惚の表情を浮かべる聖女の、エロティックともいべき姿態を彫刻家は再現したのです。このバロック芸術を代表する傑作を見るために、わたしも何度かこの教会に足を運んだのですが、この彫刻が高いところに置かれているので、聖女に槍を向ける天使はよく見えるのですが、肝心のテレサの浮かべる表情がはっきり見えず、もどかしい思いをしたという記憶ばかりが残っています。



「聖女テレサの法悦」

それはともかくとして、この天使が振り上げる槍の方向が4番目の枢機卿殺しの現場を示している、ということになります。それは、最初の殺人現場サンタ・マリア・デル・ポポロ教会の 1.5km ばかり南にあるナヴォーナ広場なのです。かくして4つの殺人現場による「殺しの十字架」が形作られることになる。ナヴォーナ広場にも彫刻家ベルニーニの設計による「四大河川の噴水」があり、4番目の枢機卿はこの噴水で水攻めの刑に処せられま

す。四大元素の四つ目(水)が4番目の処刑を演出するのです。自動車の進入が禁止されているこの広場は、数あるローマの広場の内でも最もわたしの気に入っている広場です。広場とは本来人間の寄り集う社交場なのであって、車がその中を走る回るなんぞはもつてのほかです。その意味で、ヴェネツィアのサン・マルコ広場、ローマのナヴォーナ広場、パリのパレ・ロワイヤルの中庭などは最も人間くさい場所だと思います。

1598年ナポリに生を受けたベルニーニ(Gian Lorenzo Bernini)は、17世紀イタリアのバロック芸術を代表する彫刻家であり、建築家でした。彼はまた舞台設計もやり、みずから脚本を書いて舞台に立つとともに、詩を書き、絵筆も取りました。彼の同時代人たちは、ベルニーニのことを「ミケランジェロの再来だ」と見なしていたほどです。『天使と悪魔』のストーリーがこのベルニーニの作品群に添うようにして展開していることにお気づきでしょうか。今一度おさらいをしてみましょう。最初の枢機卿殺しがおこなわれたサンタ・マリア・デル・ポポロ教会のキージ礼拝堂は、ラファエッロの設計によるものですが、そこに置かれているベルニーニ制作の「アバククと天使」の天使の指先が、第二の犯行現場を示唆している。そして第二の犯行がなされるのは、まさしくサン・ピエトロ広場(ベルニーニの設計)なのです。さらに第三の犯行現場は、ベルニーニの最高傑作といわれる「聖女テレサの法悦」の安置されているサンタ・マリア・デッラ・ヴィットリア教会。聖女テレサを射抜こうと天使が振り上げる槍の方向が4番目の枢機卿殺しの現場を示しており、それはほかならぬベルニーニの設計した「四大河川の噴水」で実行されました。このように犯行の現場をたどってゆくなれば、この映画はまさに「ベルニーニの設計した舞台装

置」の様相を呈していることがわかります。

このほか、ヴァチカン・シティーの警備に当たる「スイス傭兵隊」、「根比べ」ならぬ「コンクラベ」というおもしろい名前をもつ、枢機卿同士による新教皇選挙(本当の意味は、“camera che si può chiudere con la chiave”つまり「鍵のかかる密室」なのだそうです)、「カメルレンゴ」(教皇座空位の際に教皇の役割を代行する枢機卿のこと)など書きたいことはいろいろとあるのですが、もう紙数も尽きたようです。最後に、「観光スポット巡り」という観点から、もう一つのアメリカ映画『ローマの休日』*Roman Holiday* との比較を試みてみたい。「ローマを舞台にしたメロドラマ」の回で、映画「ローマの休日」をとりあげたことを覚えておられる読者がおられるかもしれない。その際、オードリー・ヘップバーンとグレゴリー・ペックの黄金コンビが訪れるローマの名所旧跡を次のように列挙しました。「フォロ・ロマーノ」、「マルグッタ街51番地」、「トレヴィの泉」、「スペイン階段」、「パンテオン付近」、「サンタ・マリア・イン・コスメディン教会」、「サンタンジェロ城」、「ブランカッチョ宮殿」。これらの観光スポットのうち『天使と悪魔』のそれと重複するのは、「パンテオン付近」と「サンタンジェロ城」の二カ所ですが、じつは『ローマの休日』のカップルはこの二つの建造物の中には入っていません。したがって、これら新旧二つの「ローマ名所巡りの映画」には接点が一つもない、ということに今回気がつきました。くだらないことかも知れませんが、わたしなりの発見です。逆に云うならば、ローマという都市はそれほど奥が深く、二つや三つの映画程度ではカバーしきれない、ということになりましょうか。

(京都大学名誉教授・フランス文学)

### … 会館 だ よ り …

#### イタリア語 無料体験レッスン

7月から開講の夏期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。予約制。

● 梅田:大阪駅前第4ビル

7/ 2 (木) 19:00~20:30

● 四条烏丸:ウイングス京都

7/ 6 (月) 19:00~20:30

● 京都本校:日本イタリア京都會館

7/ 4 (土) 13:00~14:30

7/ 4 (土) 15:00~16:30

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都會館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italia.on.arena.ne.jp

URL: http://www.italia.on.arena.ne.jp